

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究 C

研究期間：2009～2012

課題番号：21530992

研究課題名（和文）へき地における教育実習を中心とした滞在型教育カリキュラム開発研究

研究課題名（英文）The long-stay student teaching curriculum development research in remote area

研究代表者

里井 洋一（SATOI YOICHI）

琉球大学・教育学部・教授

研究者番号：50215761

研究成果の概要（和文）：

①台湾の僻地金門においては豊かな「郷土教育」教材が作成され、その対岸の中国アモイ市が金門郷土教育に強い関心を示していることが明らかとなった。

②西表島において『ガイド学習』を实践されて来られた仲村貞子先生（以下貞子先生）の記録を収集し整理した。

③船浦中学校における「学びあい」の軌跡を学びのカリキュラムとして整理し教材化を行い、教材をもとに僻地教育実習を行い、さらに教育実習の実際をリフレクションすることによって、学生の学びとその深化を分析することができた。

④僻地に教育実習の拠点校をおくことによって、「学生と教員との学び」を構築することを可能にするという事例を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：

① We collected rich " education for local patriotism " teaching materials in Taiwan and Chinmentao.

It clarified that the Chinese Amoy city which is in the opposite shore in Chinmentao on it showed the interest which is strong in the education for local patriotism in Chinmentao.

② We collected and organized the record of Nakamura Sadako Who have had practice Guide Learning at Iriomote-jima.

③ We organized the track of " it learns each other " in the Funaura junior high school as the curriculum of the learning.

On it, we practiced in the Funaura junior high school based on the teaching materials. Moreover, we could analyze the learning of a student and the deepening by that there was looking back to the practice with the student.

④ We could place the base school of the student teaching in the remote area. The thing made it possible to build " the learning of a student and a teacher ".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：教育学

科研費の分科・教科教育

キーワード：僻地教育、実践的カリキュラム、教育実習

#### 1. 研究開始当初の背景

沖縄県の公立学校の4割はいわゆる「へき地校指定」を受けた学校で、小規模・複式等を抱えている。へき地における学校教育は、都市部大規模校とは違う学校運営、地域との関係、学習指導など、その長所・短所があげられ、その独自性が指摘されている。しかし、琉球大学教育学部において沖縄県教員がかならず赴任しなければならない「へき地校」に関わる具体的な教員養成カリキュラムは存在しなかった。本研究においては、「へき地教育」に関する、より実践的な教育カリキュラムを開発するための研究を企図した。

#### 2. 研究の目的

本研究においては、「へき地教育」に関する、より実践的な教育カリキュラムを開発するための研究を実施する。具体的には、西表島にへき地教育実習のための拠点をつくる。教育実習にとどまらず、拠点となった学校における授業改善研究を大学教員とともに行うことによって、滞在型のカリキュラムを開発することをめざした。このことは地域に開かれた学びの場を提供することにもつながり、西表島の教員が日常の学校現場を長期間離れることなく研修の機会を得ることができることを期待した。

#### 3. 研究の方法

- (1) 静岡県の離島である初島小中学校のへき地教育に関する調査・分析を行い、パラオ・台湾における離島僻地カリキュラムに関する調査研究を実施した。
- (2) 竹富町管内における学校の実践史研究を行った。結果、『ガイド学習』という継承すべき内容・方法を見だし、その実践家である仲村貞子さんを調査し、データ化し、一部分析を加えた。
- (3) 離島における学びがどのように実施されているのか、拠点校の教員とともに教材および授業を協同研究し、学生の学びに必要な実践的な教材開発を検討した。
- (4) 離島地域における学生・院生の卒業研究等の調査研究を推進した。
- (5) 竹富町管内の教員を対象に研修を実施

し、教員との研修・懇談から教材開発の方向性をさぐった。

- (6) 「島嶼へき地教育実習」を実施し、その教育効果について検証し、学生の学びから必要なカリキュラム開発の方向性を検討した。

#### 4. 研究成果

初年度は研究の予備的段階として資料収集をおこなった。

海外調査のポイントは二点である。僻地における実習のあり方、それを支える僻地独自のカリキュラムである。この内、特に後者に関して蓄積のある台湾・金門とパラオを調査地点に選んだ。

予想に反せず金門においては豊かな「郷土教育」教材が作成され、その実践の具体的な記録を入手することができた。また、この調査の過程で中国アモイ市が金門郷土教育に強い関心を示していることが明らかとなったため、中国アモイ市で補足調査を行い、中国農村（僻地）教育と郷土教育に関する資料も収集した。これらの教材は、後述する竹富町小学校社会科副読本「むすびあうしま島」における教材作成過程において大きな役割を果たした。

パラオにおいては1994年直後に作成された独自の教育カリキュラム資料を入手し、その実践のありように関する文献と聞き取りを行った。調査のプロセスで在日パラオ大使が環境保存教育プログラムに携わったことが判明したため、パラオ大使館で補足調査を行った。これらの調査資料は学生の滞在型カリキュラムの教育内容を構成する重要な参考データとなった。この調査データは、僻地教育を専攻する学生の卒業論文の資料となった。また、西表島教育研究集会30周年記念大会で、西表島で僻地教育をされた方々のお話を記録した。また、現在の教育課題を解決する上で重要な意味をもつ西表島の『ガイド学習』実践資料も収集することができた。特に長年『ガイド学習』を営んでこられた仲村貞子先生とともに船浦中学校との共同研究の場を設けることが確認されたことは本研究における重要なメルクマールとなることとなった。また、西表島における白浜・船浮二校で実習を実施し、学生の学びに関するデータを蓄積した。

二年目の研究は三つの柱によって構成し

た。  
一つ目は昨年の海外の実践に引き継いで、日本国内の僻地での教育実践を調査することである。この点に関しては、加藤好一が静岡県熱海の離島初島での僻地教育調査をしていただいた。初島小中学校から提供していただいた資料によって、『ガイド学習』の日本的な広がりを確認することもできた。

二つ目は、長年、西表島において『ガイド学習』を実践されて来られた仲村貞子先生（以下貞子先生）の記録を収集し整理したことである。この整理によって1973年北海道で生まれた『ガイド学習』が沖縄西表島に伝わり、仲村貞子先生の小学校での『ガイド学習』の記録が、現在多くの学校で一つの目標となっている「学びあい」を具体的に示すものであることも明らかになった。

三つ目は船浦中学校における「学びあい」の軌跡を学びのカリキュラムとして整理したことである。

1年間船浦中学校の研修会で仲村貞子先生を交えて共同で授業づくりを行い、授業記録を作ってきた。

最初の仲村貞子先生を交えての研修会は次のような形で始まった。

2010年5月19日、船浦中学校3年教室にて、(模擬)授業形式の研修が行われた。テーマは“小野田さんの講演会から”である。教師役は里井洋一(琉球大学)、ガイド(リーダー)は貞子先生、そして他の船浦中学校教員はガイド役を演じるという想定 of 模擬授業が行われた。

模擬授業の後、ガイド学習(学び合い学習)のテクニックを巡って次のような学び合いが展開した。

まずは、ガイドの役割とは何なのだろうかというある先生の問いから始まった。この口火によって、貞子先生は学習進行係であり、先生からの課題をみんなで考えていくために進めていく学習のリード役で、誰にでもできるものだと答えた。誰にでもできると言われてもと言う雰囲気が流れるや、A先生が「生徒の意見をつなげたり、深めたりする役なんですね。方法が少しわかった気がする。」とつなげた。さらに貞子先生は、友達の知恵をもらう。友達に知恵を与える。みんなで知恵を出し合い“おみやげ”を持ち帰るために、子どもたちは学校に集まるのである。とさらに議論を深めた。

ここで、教頭が視点を変えて、ガイドを育てないといけないし、間違いを恐れない雰囲気作りをしないといけない。それに、学習用語の使い方等、どうやってスタートさせていけばいいのかという問題提起をしてさらに議論を発展させた。貞子先生は同時に教えてあげることとは可能である。はじめは、「○○と言ってください」「わからないときは『○

○○です』と、言い方を教えてあげるのです。最初は“手とり足取り”教えていくと述べた。

ここで、上原小学校の学び合い実践がB先生から報告され、さらに貞子先生が進行は、朝の会の日直さんが行き、スピーチ集会の司会等は学習進行係が行いガイドとしての基礎が養われると説明した。

ガイド指導を入れることに不安であり、時間がかかりすぎるのではないかと、実験などを子どもに任せることができないのではないかとという問題点が指摘される中で、貞子先生は指導者は、あくまでも教師であり実験は教師が準備しなければならないと言明された。校長はすべての授業に教師を入れるということではなく、学び合いに有効な時にガイドが置かれ臨機応変に対応することが肝要であると述べた。

里井は校長先生の言をさらに付加して次のように述べた。

今までの学力観は個人の能力を高めることを目標としてきた。PISAをはじめ、新指導要領では、それでは世界が立ち行かないので、他者を認める能力、すなわち「よく聞く。共感する。」事や、知を分かち合う能力、すなわち「付け足したり、視点を変えたり」する事、が重要視されるようになった。「ガイド養成」ではなく、学び合うことによって、互いに認め合う豊かな世界をつくるのが目的なのである。まずはスタートして、少しずつ少しずつ実践を積み重ね、3学期に「学び合いが」先生方に見えてきたらいいのでは？という形でまとめたのである。

教師集団の目標は教師役やガイド役から、学び合いに必要な進め方や技術を学ぶこととなった。

このようにして生み出された船浦中学校の授業記録は数学・社会・英語・音楽という教科だけでなく、特設授業である平和教育に及んでいる。

この研修の中での教師間の学びあいそして子どもの学びの記録が僻地教育実習のための基盤の一つになり、次年度の船浦中学校での教育実習教材となった。

以上、この三つの柱を形に見えるものとして、『西表島仲村貞子ガイド学習実践の継承-船浦中「学びあい」のカリキュラム』を編集し、2011年3月28日に科研の報告書として発行した。この報告書は、へき地教育実習に参加する学生が学ぶ教材として活用した。

三年目は中間報告書の教材をもとに、具体的な教育実習を実施するための授業構想を準備し滞在型僻地実習を具体的に西表島の三校で実施した。実施の具体像は船浦中を事例に説明をする。

実施するにあたって、昨年度作成した『西表島仲村貞子ガイド学習実践の継承-船浦中

「学びあい」のカリキュラム』に基づき、船浦中学校の職員とともに研修会を行い、数学・社会・英語・音楽という教科だけでなく・特設授業である平和教育に及ぶ教師間の学びあいを、ワークショップをとおして学ぶことによって、蓄積されてきた知見を受け継ぐという試みをおこなった。

この研修の成果は、事前に『西表島仲村貞子ガイド学習実践の継承-船浦中「学びあい」のカリキュラム』を学んでいる実習生との共通認識をはぐくむことにつながり、学生に対する意味ある指導をしていただくことができた。

また、船浦中学校の研修会で昨年度に引き続き共同で授業づくりを行い、授業記録を作ってきた。授業記録は理科・数学・国語という昨年できなかった教科に及んでいる。この研修の中での教師間の学びあいそして子どもの学びの記録が僻地教育実習のための基盤の一つにもつながった。

10月、学生4人が船浦中学校で僻地教育実習を行い、同時に琉球大学西表実験所宿泊棟を利用して実習を振り返るといって授業を行い、実習をより効果あるものにするを可能とした。

このような、僻地教育実習は6月に船浮小学校、10月に白浜小学校でも行われ、特に10月には小中学校との連携をはかる試みが行われた。

最終年度は2011年度に行った西表島の船浦中学校での僻地教育実習、同じく2012年度に行った小学校二校での僻地教育実習の記録の作成とその教育効果の分析と若干の補足調査資料を、報告書『滞在型教育実習の試行--西表島における学びを中心に』にまとめた。

船浦中学校の実習では、事前学習として、2010年度に刊行した本科研の報告書『西表島仲村貞子『ガイド学習』実践の継承-船浦中「学びあい」のカリキュラム』を多様な教科および僻地の子どもの学びを読みとる教材として使用した。また、実際の教育実習では、僻地でしか味わえないような教科を越えた生活指導・特別活動にも学生の学びが読みとれた。

また、教材や実習を提供してもらった船浦中学校の先生方とは、本研究の冒頭から子どもの学びを豊かにするための協同研究を行い、最終年度も協同研究を続け、報告書に目を通していただき意見をいただいた。

また、西表島での小学校での僻地教育実習の試みは本科研以前の2003年から始まり、科研最終年度では、「学生と教員との学び」を構築するという形で改善を図った。特に疑問に対しても丁寧に応えてくれる先輩教師としての姿は、学生たちの多くが、「また行きたい」という気持ちを引き起こしている。

それだけ離島へき地校での体験が「教師になりたい」という思いを強め、「教師のやりがい」を感じる場となっている。

また、補足調査として、石垣島や宮古島の僻地教材およびカリキュラム開発も同時に行った。その成果の一部も報告書に記載した。ただし、授業音声記録は個人情報保護との関係で目録のみにとどめている。

本研究のテーマは「へき地における教育実習を中心とした滞在型教育カリキュラム開発研究」である。この研究は、学生のみならず教員の教師教育の充実ぬきには成立しなかったと考える。

また、竹富町教育委員会との協同で、西表島の先生方と協力して、里井・山口は小学校3・4年生社会科副読本『むすびあうしま島』の編集に携わることとなり、2013年3月成就することとなった。

この教材集は、本研究で明らかになった予備調査等の知見（特に伝統文化）も生かされている。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計3件）

- ① 竹富町教育委員会、小学校3・4年生社会科副読本『むすびあうしま島』監修編集、石垣久雄、慶田盛安三、浦崎喬、里井洋一、山口剛史 2013年3月・219頁
- ② 里井洋一、加藤好一、山口剛史『滞在型教育実習の試行--西表島における学びを中心に--』(科研報告書) 2013年3月・87頁
- ③ 里井洋一、加藤好一、山口剛史『西表島仲村貞子ガイド学習実践の継承-船浦中「学びあい」のカリキュラム』科研報告書・2011年3月・99頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

里井 洋一 (SATOI YOICHI)  
琉球大学・教育学部・教授  
研究者番号：50215761

### (2) 研究分担者

加藤 好一 (KATO YOSHIKAZU)  
琉球大学・教育学部・教授  
研究者番号：50548279  
山口 剛史 (YAMAGUSCHI TAKESHI)  
琉球大学・教育学部・准教授  
研究者番号：20381197